



東北大学 史料館

だより

No.20

2014 Mar.

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



Index

- 2 「大学アーカイブズ」と
これからの大学
東京大学名誉教授・
立教学院本部調査役 寺崎昌男

- 5 史料館創立50周年記念行事

- 6 中国第一歴史档案館
利用体験記
東北大学史料館
教育研究支援者 加藤 諭

- 8 企画展を開催しました

- 9 資料の公開について
史料館のうごき

- 10 おしらせ
・埋蔵文化財調査室・植物園・史料館
による共同展示について

写真：史料館展示室（2014年1月）
右下：附属図書館学生閲覧室
（昭和戦前期）

「学びの場」での時間旅行へ

—史料館展示室（旧附属図書館学生閲覧室）—

2013年9月末、史料館の展示室がリニューアルオープンしました。従来の常設展示「歴史のなかの東北大学」のほか、文豪魯迅の仙台留学時代を紹介する魯迅記念展示室や、各種のテーマで大学の歴史を切り取り紹介する企画展示室など、すべての展示室を広大なスペースに集約し、学都仙台の時間旅行をまとめて楽しんでいただける空間となりました。

この展示室は90年前の1924年に、附属図書館の学生閲覧室として造られた空間です。1922年の法文学部創設に伴い、文科系学生を中心としつつも全学の学生が利用できる場として開かれたのが、この新しい閲覧室でした。柱を使わない開放的な空間は、戦時中でさえも夜遅くまで開放され、勤労働員で市内の工場などに勤務する学生たちは、勤務終了後市電に乗ってはこの図書館に行き閉館までの短い時間を勉強に費やしたといえます。また戦前はいつの頃からか片隅に「女子学生席」が設けられ、それはどんなに混雑していても女子学生のために空けられていたそうです。

1971年に図書館本館が川内地区に移転したあと1986年からこんどは東北大学の歴史に関する資料の保存と展示スペースとして使われてきましたが、2011年3月の大震災で被害を受けたことをうけ、新たなかたちで整備されました。ここで昔の学生気分を味わってみてはいかがでしょうか？

東北大学史料館創立五十周年記念講演 講演要録

「大学アーカイブズ」とこれからの大学

東京大学名誉教授・立教学院本部調査役

寺崎昌男



東大大学院生の頃、指導教官だった海後宗臣先生をキャップに、スタンフォード大学との戦後日本教育改革に関する共同研究が始まりました(1959年)。私はアシスタントの一人として東大内の文書に接する機会を与えられました。これは今思えば譬えようもないほどの幸運でした。ただし駆け出しの院生だった私には「アーカイブズ(文書館)不在の状況下で大学保存の文書を見ることが出来る」ということの希少価値はピンと分かっていませんでした。その後1980年ごろまで、アーカイブズは大学の中でも少数の人にしか知られていない機関でした。しかし2000年ごろから、「あってほしい機関」になってきました。約30年の間に変化が起きたのです。

東大では百年史編纂の仲間たちとアーカイブズを作ることをさんざん主張したのですが、近年は立教大、大東文化大、大阪女学院大、東京芸大、獨協大、近畿大などの大学でもアーカイブズに関わりを持ったり話を依頼されたりしています。「アーカイブズを作りたい」「良い沿革史を作りたい」というテーマならばいつでも「花咲爺さん」になります、と公言しております。

むなしく叫んでいたころ 話を戻しましょう。1980年代半ばころは、同志社の社史資料室、東北大学の記念資料室、早稲田大学の大学史編集所などがありました。そのほとんどは沿革史編集作業グループのオフィスでした。東大の場合、私どもは、歴代の総長に何回も史料保存の重要性和文書センター設置の要望をしましたが、なかなか話が合いませんでした。我々が抱いていたのはキャンパスの裏手にあった通信連絡倉庫という非現用公文書保存倉庫のイメージでした。総長たちの認識も変わらない程度だったでしょう。教授たちの中には外国の大学でアーカイブズを使って学位を取った人もいたのですが、東大にそれが無いという問題に気付いている様子はありませんでした。またその頃我々は、「アーカイブズの学術的効用」ということだけしか主張しませんでした。それが説得力を失わせていたとも考えられます。また日本の大学の歴史は浅く、百年しかたっていない、その大学の中に貴重な史料があるはずがない。たぶんそういう暗黙の理解も、先生方の頭のなかにあったと思います。

30年間の変化 ところがこの30年間に非常に大きい変化が起きました。一つは、アーカイブズは大学が持つべき「アカウントビリティ」を証明する機関になってきた、ということです。「アカウントビリティ」はすべての事業所・企業・官庁が持つべきもので、大学も同様です。これは私どもの頃には考えつかなかった原理です。当然、史料公開の必要性が生まれてきました。二番目は、内部質保証システムの一環になるということです。3年前に公益財団法人大学基準協会がつくった新しい「大学評価システム」の説明資料の「内部質保障」という見出しのもとには「基礎データの組織的・継続的収集と管理」「大学沿革史の編纂」「大学文書の保存と活用」といった項目が新しく入りました。これは画期的な変化でした。各大学に課された7年ごとのいわゆる認証評価の時に、必ずこれらが問われることになると思います。三番目に無視できないことは、「大学全入状態」の出現です。18歳の若者たちが好き嫌いさえしなければどこかの大学に入れるという時代が来ました。それは特に「大学と学生の関係」というものに深い影響を与えました。自分の入った大学や学部・学科に帰属感を持ってない学生が増えてきたのです。一般入試の学生が特に問題だといわれます。またいわゆる高偏差値の大学ほど、学生の本意入学度が低いとも言われます。大げさに言うと、日本の大学

は不本意入学者であふれかえっています。そこに軸を入れるのに、今さまざまな形で行われている「自校教育」という大学教育方法があります。学生たち特に初年次の学生たちに、自分の入っている大学、属する学部や学科、そのそれぞれの特色や伝統などを教える正規の教育科目を置くことが勧められています。そのために不可欠なのがアーカイブズの存在です。アーカイブズにおける資料の蓄積と整理・活用があつて初めて、学生にこの大学、学部・学科・教室等々はどう歩んできたかを教えることができます。それによって、教員・学生・職員等々が大学のアイデンティティを共有することができ、特に学生たちに帰属意識を育てることができるのです。その際非常に大事なのは disclosing すなわち隠さないことです。この大学を創るのに、また不況や戦争を潜り抜けるのに、先輩たちは大変苦勞もしたし、また汚いこと、恥となることもやってきました。それらを正確に話すことを通じて、学生たちは初めて自分の「居場所」を確認することができるのです。

海外に学ぶ もう一度思い出に戻らせて下さい。私にも大学アーカイブズに触れるため海外に行くチャンスが生まれました。東大の年史がやっと終わるころ、アメリカのSAA (Society of the American Archivists) という協会の大会に参加することができました (1986年)。発見の第一は、大学アーカイブズ関係者がものすごく熱心で、さらに有力らしいということでした。たとえばアーキビストと歴史研究のかかわり、つまり固有の職分論をめぐるワークショップでは、若手の歴史家とベテランの大学アーキビストが火花の散るような議論をやっておりました。別の会場ではマサチューセッツ工科大学のアーキビストが、部局からくる文書の選別のポイントは何かを出席者を自在に指名しながらどんどん講義して行っていました。堂々たる女性アーキビストでした。

勉強した二つ目は、アメリカの University and College Archives は、ヨーロッパの遺産にプラスアルファをしたものだという事です。ヨーロッパから受け継いだ遺産の一つは Manuscript 保存の伝統、二つは、財産目録をきちんと保存しておくことでした。しかしアメリカでもう一つのもものが加わった。それはコミュニティに対する貢献です。「我々はこれを大事にしている」と言うんですね。思い当たることがありました。東大の編集室で全世界のアーカイブズの調査をやったとき、アメリカでは、ジュニアカレッジあるいはコミュニティカレッジを含めて確か94%もの大学がアーカイブズを作っていることになっていました。これは「アーカイブズは学術的利用に役立つ」というとらえ方とは違う背景なしには起こりえない現象です。東大にもアーカイブズを作りましようと言っていた私たちの頭にあった利用者は狭い学界でした。ところがアメリカの関係者たちは、アーカイブズの利用者を地域に広がるものとして想定していました。

第三にわかったことは、アーカイブズごとの「個性」です。アーカイブズは皆同じものだと思わなくていい。ミネソタ大学へ行くと、そこは大学の教育活動についての資料を重点的に集めておりました。シカゴ大学では、「うちの特色は管理運営機関の公的文書を集めることだ」と言います。著名女子大学の一つ、ウェルズリー大学は、辞めた教職員や卒業生とかの文書の寄付を精力的に募っているという印象の大学でした。アーカイブズには特色があつていいんだ、と気付かされました。

大学の変化・改革とアーカイブズの役割 先ほど申しました自校教育の素材提供ですが、アーカイブズはこれには大きい役割を果たすと思います。自校教育の相手は在校生・志願者・父母・同窓生・地域の人たちその他になりますが、特に地域の方たちは非常に重要です。最近立教大学で自校史のテキストをブックレットのかたちで出しました。そうすると最も先に反応が返ってきたのは、近くにお住まいの方たちでした。総理の一人について「私たちはタッカーさんなんて気安く言っていたのですが、こんな方だったんですね」とか言われます。また校友会の方たちも大きな関心を持たれます。これらを知るにつけても思うのですが、保存資料を展示したり公表したりする技術あるいは理論をもう少し頑張って開発していく必要があります。最近は展示問題に絞って研究していらっしゃる若手の方もいらっしゃるようですが、大事なテーマです。今立教では展示館を作ろうとしておりますけれども、勘、コツ、経験しかないという状況では困ります。今後もさら

なる本格的な調査や研究があつてしかるべきテーマだと思います。

二番目に、大学アーカイブズと言うからには、大学の内部制度・政策動向・情報環境・リーダーシップ・文化伝統などに関する研究が必要です。内部制度とは今の国立大学だったら経営協議会、教学研究評議会あるいは役員会・学長などになりますが、歴史をさかのぼると評議会、教授会、全学委員会、さらに学部、講座、学科、コース等々のシステムになります。そうした管理運営機関の相互関係とか上下関係とか、そこで産み出される記録の取り扱い方の違いとかを知っておく必要がある。つまり大学の組織に関する体系的研究がどうしても必要になって来ます。他方、政策動向は、もちろん大学とアーカイブズとの関係を決定する要因です。大学に関する情報環境というのも先述のように評価を主軸として変わってきつつあります。また大学が持っている文化伝統を勉強し解明することも University Archivists の大事な教養ではないかと思ひます。

三番目は、「at for か」という問題です。関東大震災の後、東京帝大に地震研究所ができたとき、研究所のメンバーたちは、「地震研は『at』の研究所であつて『for』ではない」と揚言していたと言われます。“地震研究は今、世界的規模で進んでいる、その研究の場所がたまたま東京帝大に設けられたということだ、すなわち「at」だ、東大のためにやってるわけではない”。これが真意だったと言われます。

しかし、アーカイブズの場合、基本的に「for」であるべきではないかと思ひます。「at」の部分は科研費による共同研究や学界基盤の共同研究とかでカバーされるべきだと思います。「at」の仕事の一つに、大学アーカイブズの最低基準を策定することなどをなさってくださいたら皆が助かると思ひます。ところが「for」の重要部分は、建学の理念や校風を確認すること、そのための改革の歴史の研究であるというのが、私の意見です。特に改革の歴史は、非常に重要です。この三つはつながっていると思ひます。例えば建学の理念が必要だと言われても、それがわかる大学とわからない大学とあります。特に戦後大学になった国立新制大学がその典型です。何の建学の理念もなかったというのが、多くの大学の通例です。政策によって統合させられた大学ばかりですね。旧帝大である東京大学もそうでした。戦後と言わず明治の創設期にさかのぼっても、ただただ二つの学校を統合し「東京大学」と改称する、という太政官の達（たつし）があっただけです。言葉としての建学の精神は皆無でした。しかしその後何もなかったかと言うとそんなことはありませんでした。詳しく申し上げる時間はありませんが、時代時代において東京大学はどういう選択をしたか。これなら確定できます。私から見ると、それこそ大学が持つエートス（倫理）であり独自の校風であり、また広義の建学の理念です。

最後は大きい問題ですが、「アーカイブズを支えるマンパワーの確保」です。一番心配になるのがこの課題です。現実にアーカイブズを支えるマンパワーは、皆さん方がご承知の通り、今一番浮動的なパワーの一つです。いつ雇用期限切れを、あるいは勤務時間短縮を言われるか知れない。いつ時給の減額に会うかもしれない。これは何とか防ぎたい問題です。そこをどう突破していくかは、一大学の努力では多分できません。「at」の関係づくりの中で情報を交換しつつ改善していくほかはないでしょう。国・公・私立大学を通じ、マンパワーを確保するということが大学アーカイブズにとって基底的に重要な問題なのではないかと思ひているところです。

(平成25年9月29日 東北大学金属材料研究所講堂にて)

※この要録は、当日の講演記録をもとに、寺崎先生の了解を得て要点を抜粋編集したものです。
後日当時のシンポジウムも含めた講演記録を刊行する予定です。

史料館創立50周年記念行事をおこないました。

東北大学史料館は、1963年（昭和38）7月に、「東北大学記念資料室」として発足しました。創立50周年を迎えた2013年秋、下記の記念行事をおこないました。

◆記念講演会「これからの大学と大学アーカイブズ」……………

9月29日（日）金属材料研究所講堂

我が国における大学史研究の第一人者であり、同時に東京大学をはじめとする数多くの大学史編さん、大学アーカイブズ設立に尽力されてきた教育学者寺崎昌男先生と、東京大学・京都大学の大学アーカイブズの先生方をお招きして、記念講演会「これからの大学と大学アーカイブズ」を開催しました。

寺崎先生の基調講演では、大学アーカイブズをめぐる環境の変化をご自身の経験をもとに紹介しつつ、現代の大学においてその担うべき役割が大きくなりつつあることを、大学のアカウンタビリティや教養教育改革などとの関わりで平易にお話くださいました。またその後、京都大学大学文書館の西山伸教授、東京大学史料室の森本祥子特任准教授および当史料館の永田准教授がそれぞれの館での経験や課題をもとに大学アーカイブズの現状と課題を整理され、その後さらに寺崎先生含む4名のパネルディスカッションをおこないました。大学アーカイブズ設立に必要な課題や、大学におけるアーキビストの位置づけ・身分に関わる問題などについて、会場を交えた活発な議論がおこなわれました。



◆企画展「東北大学と大学アーカイブズの50年」……………

9月27日（金）～10月13日（日）/11月12日（火）～12月27日（金）

第2企画展示室

第2企画展示室では、史料館の50年の歴史とともに日本における大学アーカイブズの成り立ちと広がりを紹介する展示会を開催しました。日本初の大学アーカイブズとして設立された東北大学史料館（東北大学記念資料室）が歩んだ50年は、日本における「大学アーカイブズ」の歴史ともそのまま重なっています。展示では50年前の東北大学記念史料室発足時の記録やこれまでに実施してきた展示会などの資料、情報公開法や公文書管理法施行と連動した公文書移管制度の整備状況などについて、さらには国立・私立問わず近年広く設置されるようになった他大学のアーカイブズについて、資料やパネルを通じて紹介しました。



中国第一歴史档案館利用体験記

東北大学史料館 教育研究支援者

加藤 諭

2013年（平成25）11月、日本学術振興会・二国間交流事業（代表、佐藤弘夫東北大学史料館長）に参加するため筆者は中国北京市に滞在し、その最終日に中国第一歴史档案館を訪れる機会を得た。本稿は海外のナショナルアーカイブズである中国第一歴史档案館を利用した体験記である。

中国第一歴史档案館については現在 HP があるが、利用に関する具体的な手続きについてはあまり記述がない。そのため出国前に知人の研究者等を通じて中国の档案館の利用手続きについて情報を得たところ、初めて中国第一歴史档案館を利用するに当たってはパスポートに加え、研究者等の紹介状が必要であろう、ということであった。この点、今回は幸いにも、日本学術振興会・二国間交流事業オープンパートナーシップ・セミナーの開催会場である北京外国語大学日本研究センターの郭連友先生に紹介状を書いて頂けることになったほか、郭先生の計らいで北京外国語大学の大学院生沈丁心さんが当日通訳として同行して頂けることとなり、無事利用することが出来た。両氏にはこの場を借りて御礼申し上げたい。

中国第一歴史档案館は、故宮の敷地内にあるが、故宮博物院に繋がる天安門広場からではなく、西門にあたる西華門から入ることになる。筆者が訪れたのは午前9時過ぎであったが、西華門から入出する者も限られているためか、門前は北京の中心部としては喧噪とは無縁の穏やかな雰囲気であった。西華門には守衛がおり、通訳を通じ中国第一歴史档案館を利用する旨を告げパスポートを提示することで入場となる。西華門を抜けると案内表示があり、左に曲がって北に進むと数分で中国第一歴史档案館の建物に行き着く。しかし建物を入っても、すぐにメインカウンターにはたどり着けず、館内の閲覧室まではやや細長い通路をさらに進まなければならない。しばらくすると広い部屋に抜け、ロッカー備え付けの休憩コーナーに出ることにな



中国第一歴史档案館

り、その先に利用受付があった。ここでパスポートと郭先生からの紹介状を受付の係の者に提示したところ、利用登録として、身分等に関する書類の記載を求められ、その上で荷物をロッカーに預けるためのカードを渡された。手荷物であれば、ロッカーに入るが、帰国日であるため、海外旅行用のスーツケースを持参してきており、スーツケースはロッカーに収まらないため、大型の荷物は受付事務室内で保管してもらうこととなった。一方、今回利用のためロッカー施錠のためのカードは渡されたものの、これは利用後返却するカードであって、次回以降も使用できるような利用登録カード等を別途渡されることはなかった。また中国第一歴史檔案館の概要やレファレンスに関するパンフレット等も特にはなく、次回来館時にも再申請が必要であろう。ちなみにロッカー前の休憩コーナーは軽食や飲み物の持ち込みは自由なようで、1日史料調査をする際には西華門を出て食事に向かうよりは持ち込んだ方が時間的には利便性が高いと感じた。

受付が一段落すると、実際の史料の閲覧ということになるが、窓口を確認したところ、2013年（平成25）秋の時点において、原件檔案の利用は行っていないようであった。そのため檔案利用登記表が受付隣のデスク上にあったものの、それらに記載し原件檔案の出納を受けるという作業は必要性がなく、デジタル化された檔案を利用するための閲覧室に進むこととなった。デジタル化された檔案の閲覧室は受付奥の左側にあり、入り口左脇にはレファレンスカウンター、入り口から右壁にそって目録冊子棚、右奥にマイクロリーダーが置かれている他は、パソコン付きのデスクが数十台並んでおり、デジタル化された史料は、このパソコンを通じて閲覧する仕組みになっていた。パソコンのデスクトップには中文の word ファイルで利用方法に関する説明文が保存されている。しかし、よく分からなかったのでレファレンス担当者から説明を受けることとなった。パソコン画面のトップページはインターネット上の HP と表示は似ているものの、検索メニューからデジタル化された檔案にアクセス出来るようになっている点で大きく異なる。檔案検索はいくつかの方法があり、行政機構からツリー形式で検索する方法、また歴代皇帝毎にも検索メニューがあり、それぞれ時系列から目的の史料に当たれるようになっている。最終的にリストアップされた檔案一件についてクリックすることで画像が開き、デジタル化された檔案を閲覧するに至る。拡大縮小が出来、カラー画像もあるので（どの程度の件数がカラー画像であるかどうかは限られた時間の中では確認出来ず）、史料は見やすく、パソコン自体は最新のものではなかったが、レスポンスに不便を感じることもなかった。しかし「文献列表」において「電子文献」欄に何らかの記載があるものだけが画像を見られるようで、記載はあってもパソコン上からは閲覧が出来ない檔案もまま存在した。デジタル化された檔案の総点数は今後も増補されていくものと思われる。

またデジタルカメラによる撮影は禁止されており、他の利用者がマイクロリーダーで閲覧中に表示されている画面をデジタルカメラで撮影していたところ厳しく注意されていた。今回の利用に際し、複写申請は行わなかったため、複写に関する利用手続きについては分からないが、デジタル化されているとはいえ、正規の複写手続きを経るほかは、原則筆写以外に利用方法はないものと思われる。

今回、中国第一歴史檔案館の利用は初体験であり、分からないことが多かったが、受付担当者は親切に対応して下さり、もう少し厳しいレファレンスサービスを想定していた筆者としては、うれしい誤算であった。しかし、前述のように、どの檔案がデジタル化され、どの檔案がデジタル化されていないのか、ということは事前に HP 上からでは判断出来ず、原件檔案の利用が出来ない状況を見ると、外国人研究者が中国第一歴史檔案館を本格的な史料調査を目的とした場合、ナショナルアーカイブズとして利用しやすい状況にある、とは言いきれない。筆者は日本近現代史、大学アーカイブズ史が専門であり中国近現代史についての専門ではないことから、今回の利用において所蔵資料に基づく具体的な史料調査は行わなかったため、特段の不都合を感じなかったが、本格的な史料調査に向かうのであれば、目的とする檔案がデジタル化されているか否かの事前の照会は必須と言えよう。

◆企画展を開催しました

女子学生の誕生—100年前の挑戦—

9月27日～12月27日 第1企画展示室

1913年（大正2年）夏に3人の女性が東北帝国大学理科大学に入学してから100周年の節目に当たるのを記念に、「東北大学女子学生入学百周年記念事業」の一環として標記企画展を開催しました。展示開始の2日前にあたる9月25日には、改装なった新しい展示室のお披露目も兼ねた内覧会も開催しました。

展示は3人の女性が入学するまでの経緯（①出願まで②入学試験③入学決定後の反応）、学生生活、卒業、その後の人生、といった時系列で彼女たちの動向を紹介するとともに、大型エアタイトケース1台を使って、このたび当館に新たに寄贈が決まった「黒田チカ資料中」のなかから、写真、実験ノート、実験着、恩師真島利行からの数多くの書簡など主な資料を展示し、また『東北大学五十年史』編纂時に収録された黒田チカの肉声インタビューを会場入り口にパソコンを使用して流しました。そのほか3人の女性たちのあとに入学した代表的女子学生6名についてもパネルによる紹介展示をおこないました。約3か月の展示期間、展示日数は土曜日曜開館をふくめ合計78日間。その間の展示見学者数は約2037名に及びました。なお会の開催に当たっては、お茶の水女子大学歴史資料館および日本女子大学成瀬記念館から資料提供などの協力を得ました。



村岡典嗣展—日本思想史学と東北大学

10月16日（水）～11月10日（日） 第2企画展示室

村岡 典嗣（むらおか つねつぐ 1884～1946）は、1924年（大正13）の東北帝国大学法文学部（現在の東北大学法・経済・文学部の前身）創設時からの教授で、日本思想史学の確立を果たした研究者といわれます。史料館では近年、関連資料の整理が進み、村岡自身の文書（358点）、門下生の梅沢伊勢三（1910～1989）の文書（128点）、村岡の後任教授となった竹岡勝也（1893～1958）の文書（79点）などが公開されました。さらに、村岡ゆかりの日本思想史学会2013年度大会が、10月に東北大学川内北キャンパスで開催されたことをきっかけに、本展示を企画することになりました。開催にあたっては、日本思想史学会と史料館の共催とし、学会及び東北大学日本思想史研究室関係者の皆様に種々のご支援をいただきました。

実際の展示では全体を、①村岡典嗣について、②村岡と人文科学、③研究ノート、④竹岡勝也、⑤門下生たち、⑥日本思想史学会前史と東北大学、という6部門から構成し、加えて「日本思想史関係図書」のコーナーを設け、村岡の著書、学会誌『日本思想史学』全バックナンバー（1～45号）、日本思想史学会奨励賞受賞者著作数点を展示しました。また簡略なパンフレットを作成し、学会参加者全員に配布し、一般の来館者にも配りました。専門の研究者はもちろんですが、一般の方にも東北大学の学問的伝統の一端が紹介できたならば幸いです。



村岡館長を囲む図書館職員たち
（当時の図書館＝現在の史料館入口付近）

資料の公開について

◆石崎政一郎文書Ⅱ（法文学部教員適格審査委員会関係文書） 19点

石崎政一郎（1985～1972）は、労働法を専門とする法律学者。1934（昭和9）年9月に東北帝国大学法文学部に赴任し社会法論講座を担当、1959（昭和34）年3月に定年退職しその後立教大学・上智大学で教鞭を執りました。

今回公開する資料は、石崎政一郎旧蔵資料の内、東北帝国大学法文学部教員適格審査委員会に関する資料です。法文学部教員適格審査委員会は、1945年10月および1946年1月のGHQの指令に基づく文部省訓令によって設置された「大学教員適格審査委員会」の一つ（総合大学である東北帝国大学

では当初学部単位に委員会が設置された）で、石崎は同委員会の幹事として事務的なとりまとめを担当していました。資料の中には、文部省に提出した適格審査関係の報告書に加え、法文学部委員会内での検討に際して収集・作成された諸資料、審査対象となった教官との往復書簡等が含まれており、同委員会での検討の様子を具体的に知ることができる良質の資料です。



史料館のうごき（2013.9～2014.2）

◆片平まつり2013 10/12（土）～13（日） 東北大学片平キャンパス

2年に一度の恒例行事「片平まつり2013」（東北大学附置研究所一般公開）が10月12（土）、13（日）の両日片平・星陵キャンパス内でおこなわれました。当館でも「タイムマシンに乗ってみたい？」と題し、開催中の常設展・企画展のほか（1）かつての大学生が着た学生服・マントや角帽を着用してかつての大学生の気分を味わっていただく「むかしの学生に変身!」、（2）ローマ・オリンピックに出場した東北大学ボート部の記録にエルゴメーターで挑戦する「マシン・ボート体験!」などの企画を実施。また10月13日には片平まつり特別企画としてキャンパス内の歴史建造物やスポットを解説付きでご案内する「片平キャンパス歴史散歩」も実施し多くの方にご参加いただきました。

◆吉野作造記念館企画展 吉野作造と近代中国（当館共催企画展 10/24-12/27）

吉野作造記念館（大崎市古川）にて、当館の共催企画展として、「吉野作造と近代中国」展が開催されました。展示会では、中国問題を重要な研究テーマとし、革命運動を担う中国人青年を支援した吉野作造と中国知識人との交流とともに、学都仙台で学ぶ留学生たちを中心とする宮城県における日中交流の歴史についても、当館所蔵の留学生関係資料などを通じて紹介されました。またオープニング講演会として当館永田准教授の講演「学都仙台と中国人留学生」（10/27）も開催されました。

◆定年退職教員業績目録の TOUR 公開（2014/ 1/28）

昭和39年度以降、本学教員の学術研究その他の本学での活動記録として当館で作成してきました「東北大学定年退職教員業績目録」のPDF版を、東北大学機関リポジトリ（TOUR）を通じて公開することとなり、第一弾として平成23年度末に退職された教員の業績目録公開を開始いたしました。過去の退職教員のデータにつきましても準備が整い次第順次公開していく予定です。

川内萩ホール展示ギャラリー

かわうち今昔ものがたり

埋蔵文化財調査室・植物園・史料館による共同展示

開場時間 9:30~17:00

毎週火曜日および定期点検日は休館



江戸時代初期の屋敷跡から出土した志野焼陶器南蛮人人形



仙台城二の丸跡出土荷札木筒



第二師団での兵士たちの生活用品



東北大学教養部の表札

広瀬川の清流と青葉山の森に囲まれた川内地区は、古来さまざまな人びとが足跡を残した場でもあります。中世、仙台平野を代表する霊場であったと言われるこの場所は、やがて仙台城とそこに仕える重臣たちの居住地となり、さらに近代には陸軍や米軍の軍事施設として使われるなど、常に特別な場であり続けました。

この展示では、現在東北大学のキャンパスとして使われている川内の自然と歴史を、構内の発掘調査成果や本学に残されている様々な資料を通じてご紹介いたします。

展示の内容

- (1) 川内の自然：川内と青葉山の自然地形や植生について
- (2) 古代・中世の川内：古代・中世における川内の遺跡や遺物
- (3) 江戸時代の川内—仙台城二の丸と武家屋敷：発掘成果と出土遺物から江戸時代の仙台城二の丸と武家屋敷の様子
- (4) 近代の川内：第二師団が置かれ「軍都」仙台の中核となった近代の川内の様子
- (5) 川内キャンパスの誕生：戦後昭和33年に川内キャンパスが誕生した経緯とその後の変遷
- (6) 川内萩ホール：創立50周年から100周年へ

東北大学史料館だより 第20号 2014年3月31日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区片平2-1-1 TEL 022-217-5040

E-mail desk-tua@library.tohoku.ac.jp URL <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/>